

今次世界同時不況下におけるアイデンティティと啓蒙主義

森 芳 三

一 貧窮層のアイデンティティのあり方

今次世界同時不況と金融危機は、二〇〇九年に入つて経済不況による停滞も底入れの様相となり一まず急場を脱したかにみえる。二〇〇九年四 六月期決算の公表によると、米国の金融大手を含めた米主要企業の決算は予想を上回る業績で、ダウ工業株三〇種平均も好調を伝え、また米主要五〇〇社のうち四二社が決算を終えたなか、七割強で実績が予想を上回つたという。勿論企業業績の回復ではないから、景気が今後どう回復するか、とくに失業率が上げ止まるかによるので低成長を脱したわけでない。ただ最悪期は脱したかという安堵感はあるう。 (日本経済新聞〇九・七・一八による) 折しも、〇九年七月二〇日は、オバマ米大統領就任から半年を迎え、少なくとも経済危機対応で一定の成果をおさめたとされている。(日経〇九・七・一八)

こうした評価の生ずる経済指数のなかで、表面に現れにくく、しかしながら多数人民がそのような状況に実際に置かれている存在として貧

民層がある。この存在は回復が最もおくれ易く、また次の不況には最も早く落ち込んでゆく。このような存在を「スラム」の概念で捉えようとした著書のあることは既に紹介した。(拙稿「形態規定の経済学と転形期経済」『山形大学紀要(社会科学)』(二〇一〇年二月・参照)) この度は具体的に貧窮の姿を紹介してみたい。その理由として、具体的な貧困生活の中で民衆の道徳的腐敗の現状・社会意識の後退、粗暴と他人・隣人の人権無視、盗み、強姦、殺害などの支配するなかで、社会の崩壊と進歩思想消滅があるからである。道徳、礼儀作法、おもいやりの達成された市民社会(「民主主義社会」)をへることによつてのみ近代的個人主体の成立、そしてより良き社会へ向うことができる。このような考えに立つて現況下貧困にメスを入れてみたい。今日そのなかで、どのような姿勢で新しい芽が育っているか、これが主旨である。

米国の姿 さて最初比較のため米国につき紹介してみよう。米国は

不況開始の時点で貧困水準以下の人口は、総人口三億人のうち四千万人

（一二三％）であつたが、不況とともに五千万人（一五％）にすぐ増加した。だが貧困率は人種によつて格差を広げ、二〇〇七年センザスによると、白人は一〇％、ヒスパニック二二％、アフリカ系アメリカ人二五％となつた。小学校生徒の五人に一人が正しく貧困層である。世界で最も豊かな国の小学校で、先生は、児童が週末から月曜の給食まで食べて行けるようにと、そつとカバンに食べ物を入れてやっているのを見たところ、私の知人が語つた。「オバマ大統領は経済不況の回復だけでなく、家庭生活水準を上げる工夫が必要なのだと報じている」（GW, 09.5.15, Report (R) p.9）次項に「ガーデアン週報」のレポートからアフリカと中国の例を要点のみに縮めて紹介する。

アフリカの姿 サワラ以南のアフリカ（以下アフリカはこれを指す）は、今次二〇〇八年世界経済恐慌に、前例のない深い貧窮と就職困難の真只中にある。アフリカは資本主義の歴史と命運をとにもできるのであるだろうか？

南アフリカ共和国はアパルトヘイトを脱却し、ネルソン・マンデラが二十七年の投獄から解放され、一九九四年に新憲法を採択、自らANNC（アフリカ国民会議）を土台に大統領となつて発足した。彼は「虹の国」を目ざし、「話し合いと和解」の態度を持し大膽な国際的評判をえた。これにはANNCの支持母体として南ア労働組合会議と南ア共産党その他

があつた。とくに南ア共産党とそのときの議長ジョー・スロボオの、黒子に徹した控え目な態度と例外的に柔軟な頭脳による機敏で抜群な政策があつた。マンデラの政策もスロボオの意見が貢献した、とマンデラは認めている。とくに国民統一政府の原理の広い支持がある。

マンデラの後継者はタボ・ムベキ（一九九九—二〇〇九）で、そのあとジェコブ・ツマが今年（二〇〇九）大統領に就任した。ともに選挙である。ムベキはマンデラの副大統領でANNCの副議長であつたが、次第に社会民主主義に移り、今年（二〇〇九年）の大統領選挙にあつては、南ア共産党からも、ANNCからも離れ、實際上、マンデラと対立した立場から選挙に臨んだ。対立はツマであつた。彼はANNCの幹部の立場（南ア共産党に所屬）から出馬した。つまりマンデラの立場に立ち、前大統領と争つたのである。ツマは奇蹟的な勝利をえ、雇用なき状態を克服する今日の課題に立ち向つている。しかし彼を待つていたものは、彼が掲げた目標にすぐ立ち向つよう求め且つ励ます人民の要求行動とデモであつた。（「抗議とデモでツマ大統領選挙勝利の「ハネムーン」もおしまい」（GW/09.7.31, p.6をみよ）なぜこのように逆転したのかをめぐる論文や本も数々出る有様である。以下はこの論争には立ち入らず、まず実情をみよう）

アフリカの経済恐慌下現況の特徴を最もよく示しているのが南アフリ

ケープタウンの高道で日雇い仕事を待つ人々



The Guardian Weekly, 09.7.24 より引用

力であろう。記者カリン・ブルリアード (Karin Brillard) が現住民の失業者フィキル・プレゼント (ニ五才) の身の上をかさねて、地域の実情とその特徴を語っている。現在のアフリカ失業問題は極めて深刻であるのは、農村集落の大半の人が現に働いていないばかりでなく、仕事をもつことが決してできないためである。最近男子ニ五才のフィキル・プレゼントが、母親の田舎の小屋住いに住み込んだ。働く仕事 (job) がなかった。近所の人で母の家の周りを世話して呉れる人はなく、町へバイクで通う人、町角で仕事を求める女性、そしてぼろをまとった人々でチップでくずをさらう仕事を待つ人々は、みな仕事を求めているのだ。「こうしたギョツオンダ (町) のような場所は今全アフリカを被っている。ここでは仕事のない人のうち二三%以上が、「仕事を求めるこそが生きざま」となった。アフリカの経済推進力であったのは「国民」であったが、今世界最高の失業率を長いこと示している。経済学者の意見によれば、アパルトヘイトのひどい遺産のせいで南アフリカの貧困と不平等があるとみている。十

五年前自由を獲得したとき黒人大衆にも経済的活動の自由が及んだかにみえたが、大部分雇用なき存在となったのは民主的政府の失政のせいとみなされている。それもまたアパルトヘイトの傷口によると説明されている。さきの青年プレゼント (ニ五才) は、「私は技術者になるか技術畑で働きたいと夢みていた」そして常に応募してきた。「それはすべて過去となり、今はただ仕事 (job) を求めるだけとなった。何でもよい、仕事さえあれば」と語った。

ヨハネスブルグのある高官は語った。「雇用がない」 (Unemployment) とは、人間の潜在能力 (human potential) の恐るべき浪費である」「すべての雇用なき人々 (定職なき人) は、彼らの生活を向上させるか、その国を開発させるべき生産的作業をすることができず、また、なすべきものである。」また新しいツマ大統領は豊かさを広げる約束で選出された人民主義者で、今年 (二〇〇九) 五〇万人の仕事を、そして二〇一四年までに三五〇万人の仕事を創出すると約束したのである。ただこうした仕事 (job) は一時的公共事業であるから、真の雇用の増加にはならないものと位置づけられる。とりわけ南アの場合順次を追って成長を数年重ねたところへ、景気後退に会ったので、仕事を失うきびしさに仕事を創出するどころでなくなった。最近の調査報告では、この地域ギョツオンダで住民の四一%以上が雇用を失い、大体の人は政府給付金で生きのびているという。ILOの報告では雇用ある人と報道された人も、仕

事を受けている人なので、一日二ドル以下の給与だという。貧困層並みだ。

南アの労働市場は、南アメリカのチリなどと比較すると、失業率において倍も悪かった。アフリカ平均八%、南アは二%という。その理由はアパルトヘイト政府の差別待遇の弊害が今も影響しているためだ。アパルトヘイト政府は、ある集落に黒人を切りはなし隔離し、そこ、あれ果てた農村地域とを、都市と学校との交通の便宜から切り離れた。黒人は学校を上級に進めることは妨げられ、そこで事業を始める機会は少なくなり、経営技術を修得することは一層むずかしくなった。「定職はさらなる定職への道である。しかし南アでは大半の人が定職からも、そこでの生活を据えることも排除されてきた。」

一九九四年アパルトヘイトが終わったとき、非熟練労働者がどつと供給過剰に現れたが、そのときの農業と鉱山業とが力強く、ギョツオンダのような集落で、仕事の大半がそれらによって供給された。ところがそれらが衰えると機械化が進み熟練労働者にとって代られた。この集落はやはり交通の便が悪く、しかも学校で仕事に就ける就業の用意はない。

二〇〇七年以後も事情は変らぬままで黒人にとって学校には入りにくく、白人には住民の十%のところ黒人にはその半分しか入れない。ギョツオンダの高校の元校長は「勉強したい人が学校制度から閉め出されている。その学校は「とんでもない」と語った。彼はまた最近、仕事の

ない住民には事業を開くことを勧めたが、大半の人は金もなく、英語は話せず、事業を開くにも知識が全くない状態なのだ。

かの青年プレゼント君は云う。「この集落の工業地帯に日雇い仕事はあるにはあるが、求める人が遥かに多く人が余っている。それに五キロメートルバス代金が七〇セントもする。建築業に仕事はあったが、雇い主は技術証明書を求める有様だ。農業の仕事は一日五ドルの最低以下で、そのうちから昼食を出す。さきのバス代。加えて過労から病気になる有様。「何もしない方がましだ」と語り、彼の先輩の話しを語った。彼はコンピューター講習に行ったとき、メダップさんに会った。彼は「私は三七才になったが、今もって定職（きまつている職）はない。」という。今警察官を志望しているが、定職を求めているからだ。「生きてゆくためには、たまたまながら「世話する力ある人」（*relat people*）にめぐり会うほかはない」と語っていた。投資は新しい技術職を生み出すが、今までの労働者は、遥かに多くの失業となって、職と食と宿を失う。（G.W. 097.24. P.18）

ナイジェリア（Nigeria）のラゴス（Lagos）市の市民生活の現況を紹介することに移る。現在一億五千万人のナイジェリアには、アフリカ第二の大都市ラゴスが千五万人で首都となっている。この港町の中にあるアジエグンル（*Ajiegunlu*）がアフリカ最大のスラム街である。報告はジ

エームス・ミークで「ガーデアン」のベテラン記者である。多少の予備知識を記してみよう。さて南アフリカ共和国のアパルトヘイトが廃棄された一九九四年は、途上国の成長率の上昇が目立ち始めた折であったが、同時に低開発国と高所得国の格差拡大が注目されたときでもあった。世界銀行の一九九五年版「世界開発報告」で低所得経済に分類された四十五カ国中アフリカ諸国二十七カ国が含まれた。他方、都市人口の急速な増加がみられ、百万人以上都市は、一九五〇年八六、一九七二年四〇〇、二〇一五年五五〇を数えるとされた。人口増加とは都市人口の増加を意味するし、その九五％は途上国によった。西アフリカのギネア湾（ラゴスも含まれる）の都市化は、十万人以上の都市につき、一九六〇年一七、二〇〇二年三〇〇と飛び上がった。ラゴスは一九五〇年〇・三（百万人）が二〇〇四年一三・四（百万人）に、約四五倍の増加で、大半が農民の出稼ぎだった。アフリカでは都市人口の大半が、同時にスラム人口で、ナイジェリアは七九％、スーダン・八五％、エチオピア・九九％という具合であった。次に実況に移るが、その実態は、「片目をあけて眠る」という題にあるように、スラムに生きるのも、そこに移るのも生死をかけた闘いが実態といえようか。生やさしいことではない。以上は、マイク・スラムの『ブラネット』（二〇〇六）から一部分のみ転記したが、その一七五頁に次の文がある。「都市とは、技術をもたない労働者、低賃金で、保護のない、非公式の（かくれた仕事の）サービス産業の従業員

の捨て場となってきたのだ。……この非公式部門の勃興は……自由化の直接の結果である。」つまり、「風俗」も「派遣」もスラムも現代資本主義そのものの姿である。（Mike Davis, 2006, pp.1-10, 175）

私（記者ミーク）がエマヌエル・エカンゲさん（Emanuel Ekang）を朝訪ねたとき、あばら屋の敷地に裸で寝込んでいた。私は建設途中の教会の崩れ散っている石材を避け開きながら敷地についたとき、彼はよれたところに寝ころがっていた。屋根もなく床もなく、子羊が建築材料の間をふらついており、女性が洗たく物をかけていた。エカンゲはすぐおきて、今おきたベンチを拭いてすすめて呉れた。彼は「牧師」であるが、私の問いに、流暢に「つまり私には私にむけ、人々にはそれなりの言葉で」話してくれた。それは予め準備でもしているように語った。この建設中の、つまり未完の教会は、彼の語ったところでは、キリスト教のセント・パトリック教会（St Patrick of Christ）であるが、いつ襲われ壊されるか解らない、「なぜなら、それが死滅のワナ」（Death trap）だからという。彼の父は教会の建設をはじめたが亡くなった。ラゴスのなかにあつて最も大きいスラムであるアジェングルでは、教会のある場所は建物区としてのぞかれていた。政府プランではアジェングルをとり除き住民を払い除ける案であった。しかし果せなかったが、そこを首都圏としたいためとり払いのいたった。ナイジェリアはアフリカの最も人口多い国

で、ラゴスはまた最も大きい都市カイロに及ばないまでも、そこに迫りたいと思っていた。すぐにも立ち除きにくる脅威は今にも来るかと迫っていた。その日暮しの貧乏人は、ここを家とし、だからこそ生きられる思いでいた。エカング（牧師）は「彼らは今日にも来るぞ」「彼らは運河の側の家はとり壊したいのだそうだ、ラゴスをロンドン、アメリカのようになりたいんだ、だが自分たちのものになりたいんだ。それをみんな心配している！だから、誰もが片目をあけて眠るのだ。」運河の近くにパン屋さんたちもいた。彼らも何年も居据っていたが、そこにいる正当な権利はないと告げられた。「厄介ものだが立ち去るまで見のがす」と政府の部局から云われた。「三日のちにパン屋や近隣は取り払われるだろう。」かといってどうすることもできないのだ、「自分たちだけでは。」新年を迎えると政府と警察は「規則違反に対する反抗」と称してラゴス空港への公道に並んだ何千もの小規模店舗を「不法」な巢として警告なしに急襲した。彼らの露店や商品はみな、ブルトザーに取り払われ、つぶされ、焼かれた。小商人たちや女たちは悲鳴をあげ、泣いた。

エカング（牧師）からみると、情容赦なく、不法な、あるいは准合法的な家屋や店舗を取り壊すのは一人の意思力（つまり権力）を示している。それはラゴス市長の力である。市長は二〇〇七年に選挙で代ったが、市民には市長が入り代り代っても同じことだと語る。つまり圧倒的な部分で（市長は）変えることはない。それは「市民と」つかみ合いをしなけ

ればならない冷徹な力である。その力が建物を壊したり、新しく建てたり、人々を追いつたり、生れ育ったところから遠くへ立ち退き追いつたりするし、膨張する市の人口の力を、個人個人にバラして孤立化し無力化するのだった。

ラゴスは年五〇万人の割で人口増加し、ナイジェリアは百万人以上の都市七を数え、人口一億五千万を上廻って、世界第八位となり、日本、ロシアを上廻った。世界の人口増加を先導し、食糧生産、雇用増加をはるかに上廻った。都市人口は急増、農村人口は衰退し、そのバランスは逆転した。「これらは資本主義、道徳的腐敗そして階級的たたかいによって造られており、計画されたものではない。」「希望は絶望を伴いながら、出稼ぎ者は都市に極楽を求めてドット移転した。」一九六〇年頃、世界史上はじめて、世界人口上、都市人口が農村人口を上廻り、また人口増加に対応できるように食糧生産を拡張する見込みはないと、一般に見透かされた。さて、なぜ農村（漁村）人口の大量移転が惹起されたか？河川の改修投資（漁業乱獲と枯渇）それによる耕作地乾燥と旱魃・飢饉の発生、幼児の飢餓、H・I・V・エイズ、教育欠如、医療不足、そして無知と迷信があった。御承知のように、ユニセフ、国境なき医師団、その他NGOが、僅かに人間に良心があるのを証明している。

ラゴス大学タイバト・ラワンソン教授は、通勤の便が悪いので、大変だと苦衷をのべる。「八時の出勤に五時起きでないと。帰りは四時に出

ないと、夜十一時までに家に着けない。週末ゆっくりしたいので、家を建てる土地も欲しいのさ。せめて子供も遊ばせたいしね。街の中のアパート一部屋よりは、多少奮発すれば子供ももてるしね。」レッキイ街道(Lekki highway)の両側の土地はみんな望んでいるが、区切りされ釣り上げられ、投機され、もはや一般人の手のでる場所ではなくなっていた。とんでもない!! 日雇いも、食も宿もないスラムの住人の生活は、想像もできない悲惨なものに陥されていた。ミーク記者はこれでもかとはかり我慢強く数々のインタビューを重ねた。そのなかから、一、二をとりあげたい。

まずムダシル・ラウルさん。彼はレッキイ土地取引の中心地区イグバラに住む祖先伝来の区長さんで、自らは鉛工職人、自分で宮殿と呼んでいる二階建て家屋に住んでいた。スラム街アジゲングルにあり、自宅兼店である。私が声をかけると、息子さん達が戸口に現れ平伏して丁寧なあいさつをした。昔ながらの伝統的な礼儀の厚い仕方だ。主人は今六〇才だが、昔こは村だったが、今は都市になり、ラゴスに合併された。子供の頃ココナツを集め街に持って行って売った。今は半島になっているが、昔は島だったので、ラゴスで売ったわけだが、貴重だったのでもい値だった。出稼ぎがここにドットおしかけてき、埋め立てられ半島化して急速に都市化した。主人はその間に四人の妻、二人の子供、二人の孫、甥姪百人になるといつ。彼らはその近辺に分居しているという。

ラゴス大学のレケ・オドワイ先生(女性)の意見によると、ラゴスの都市計画は先進国を見倣っているのに、市民はそれと比べるとはるかに立ち遅れていると「無念」がらせる。しかしそれを取り戻すのは真似ることではないと気付く⁽¹⁾。冷蔵庫がないので毎日買物をする。また洗たくトイレなど自分で修理する。とくに国立小学校を支える寄附を出すのが貧困層には苦しいという。それでいて、国立学校は「無料」だという。

記者はある朝、セント・メアリ小学校へ訪ねてみた。マココというスラム街にある。(St.Mary's in Makoko) 全くの小さい掘立小屋、電気もなく、水もなくガラス窓もなく床もない。ここに六人の先生と六つのクラスに百人もつめこまれ、黒板のほか区切りもなかった。算数の先生が大きい声を立てているのは、となりの英語の学習の声で、ききとれないのを心配したからだ。壁にポスターが掲げられていた。「オバマ・アメリカ最初の黒人大統領」とあった。校長はこう云った。「毎日民衆が外からどんどんやってくる。そして児童の数も増えてゆく。今朝数えた人数は、翌朝は増えて増加しているのだ。」ここでは人が多くなるがその人々も、死んでゆくのも葬式も、お目出度いことなのだ。「ここでは人は人として扱われるからだ。人は物ではないのだ。」医院もドミニカ教団により九年前建てたが人々は薬代は払えず、民間治療では、かえって餓死は多くなる。

私(ミート記者)は二日後の日曜日マココに行ってみた。二人の少女

が教会の白い長いドレスをきて走っていた。顔を見るとやうやしい態度であつた。また三十八才の母親に会つた。子供六人のうち四人を小学校に出していた。夫は聖霊教会の牧師で、夫婦で月一六〇ドルの収入になる。四分の一を教育に支出する。子供に一日三度食事をさせるため、夫婦はときどき食べないことが常だ。八人は一部屋住まいだ。母親はキツパリ云つた。「ここで死んでなるものか。いつかは家を建てるぞ。とくに大事なことは教育だ。子供たちは皆学校にやる。私は一人は医者になり、一人は看護師、一人は薬剤師になるのを望んでいる。彼らがいつか「ママ！こつちにおいで！」と云つのを望んでいると語つた。私が帰ろうとすると、十才位の子供が出てきて云つた。「これがマイケルだよ。彼は医者になるんだ！」と。以上で終る。次に中国をみよう。

中国の新しい出稼ぎ女子労働者・中国女工の出現

中国が経済成長へ大きく飛躍したのは一九八〇年経済特区の設立が画期となつた。広東省の深圳（Shenzhen）、珠海、汕頭（スワトウ）福建省の廈門（アモイ）の四特区である。深圳の近所に、Dongguan, Guangzhou という大都市が接近して並んでおり、パール河（Pearl river）に沿つ港でもある。これらは専ら香港、台湾の資本などの進出によつた。次書の取り扱っているのは東莞（ドンジャン）であるが、何と、過去二〇年間、年平均十五%以上の成長率を継続し、七、八百万、ないし一千万人の人

口が在籍したと云つ。その人口の大部分が出稼ぎ労働者（Migrant workers）で、そのまた大部分が女工（Factory girls）、つまり結婚前後の若い娘だといふのである。「出稼ぎ」ミグラントが中国労働者の典型的存在といふことができる。その数一億三千万人のうち三分の一が女工である。出稼ぎ女工を工場、農村、都市の中に、一人一人について調べを上げるとは至難の仕事である。これをなし遂げたのが次の本である。

レズリー・チャン『中国女工 現代中国の中心からの声』ピカドール社、二〇〇八年⁽²⁾。

中国の工場や労働者に近づき親しくなり、立ち入つたことを聞き取るには、地方語が他所^{よそ}的を感じさせないほど流暢に話せることが第一であるが、中国女工は、また、仕事のことは一切他言を禁じられ、女工同志でも仕事、身の上、郷里の村や家のことは實際上禁句とされる。今日中国経済に関する文献は多いが、具体的な人間的女工のことを詳細に叙述した本は、右が最初である。ここでは四〇〇頁のうちごく一部を私なりにビック・アップして紹介するに止る。

しかし中国の現在と未来は出稼ぎ労働者の両肩にかかっている。他のすべてが、二の次だ。これが私の強い印象である。本書はそのような印象を与え得る程度に調べ上げた本である。著者のレズリー・チャンさんは中国系米国人であるが、米国で育ち大学を卒えたのち、米国のウォール・ストリート・ジャーナル誌の通信員として中国に十年ほど在住して

いたという。現在結婚され米国住まいだ。しかしチャン家は元吉林市在住の鉱山経営者・大土地所有者で豪族一族の主家であった。日本の侵略をうけ四散し祖父母はじめ米国に移ったという。しかし今日も中国一帯に親戚が多く、全くの中国人の側面はあると思う。こんどの研究と併行して自家の歴史も、主に祖父の日記を手がかりに辿ったのを合わせ一書とした。彼女の眼目は中国人の生きざまをみえることで父祖と今日の女工とをまとめあげた。舞台としての東莞（ドンジャン）は昔、アヘンを二万箱焼き、中国近代化のノロシをあげた場所であり、こんど中国近代工場を特区に先んじて先駆した場所である。まこと、中国を占うに相応しい。ただし、東莞（ドンジャン）は今は、「工場が無限に連なる街であると同時に、売春の街である。」変革期のシンボルとして売買春は中国の今日を特徴づけている。

郷里を出る 家を出る、村を出る（go out to migrate）は中国娘には重い。中国語でChugreというのが多用されるコトバだ。娘は家計補助ではなく自立へ向かわざるをえない。おさない娘たちは、いつも家に帰り、両親に会つのを語っており、給料日には郵便局は家への送金でこんだという。しかし二、三年もすぎると、そんなこともなくなり、貯金して化粧品、服、ハイヒールとか、ボーイ・フレンドのことに心は向く。自立へはつねに心を配った。しかし彼らは二、三カ月で別の工場へ移るので、工場側は六カ月を契約し、二カ月分を敷金にとり、期限に返金するとし

たが、多くはその前に止めて移ったという。仕事は朝八時から二・三時間、寄宿舎は一部屋二人でござる寝状況、給料は一カ月四〇〇元約五〇ドル、超勤で約倍となったという。土曜日のみ超勤がなかった。

スポーツ用靴工場 ユエン工場の例 この工場は平均サラリー月七十二ドル（市の最低水準を保証）で勤め易いという。幼稚園（保育園とも）、病院、図書館、英語講習などあり、仕事と学習、女工のために医療（妊娠検査）やその他がある。村の農繁・農閑期に合わせて、工場も農閑期のカレンダーを設定している。忙しい時期の仕事は猛烈とも凄まじいとも云えた。一〇年前、スポーツ用靴を受注してから仕上げ輸送まで九〇日を要したが、数年前に六〇日となり、現在三〇日に縮めた。「抑圧的経営方法」に改め、十一時間の勤務に超勤を加え、三交代とし、日曜日以外休みはなかった。夜間交代制をとり組んだものだ。多数が中途でやめた。他にも様々に工面した。工場は毎月月の総数の半数を採用し続けた。女工が三カ月以内で止めるのに対応したものだ。これ自体、一般人に想像できないのではないだろうか。

中国出稼ぎ女工の志操 著者は出稼ぎ女工に共通の特色があるとしてこのべる。彼女らははじめ希望も向上心も持っていたが、何百という同じ身の上の仲間のなかで次第に「自分」を失う傾向だった。村に生れ貧困で教育もない自分は、何百万のうちの一人と想いつめてゆく（bid, go）それでも女工は何度も何度も出たり入ったりするなかで、「どんな

女工も情況に合うよう自己を換へてゆくのに、意思を強く持つ必要がある。」(Ibid., p.107)と気付いてゆく。家に戻ることはできないのだ。よい人と一緒にいる途はあろう。それにしても、自己を向上させるのに迫られているのだ。

著者チエンは二人の女工と信頼し合う仲となった。ミンとチュミンで彼らの身の上は矢張り貧困農家の出ながら、堅忍不拔な足どりを辿った。ミンは村の小学校から寄宿して高校を出、工場をやめ大学を卒える苦闘だった。著者は「二人とも女工の典型(Typical)とはいえない」(p.404)という。しかし私はミンらは中国女性労働者の基本的人間像であることに変わりはないと思っている。「これが中国人である」。(p.52)ミンの日記から引用してみる。「友よ、私たちは自分の過失ではないのに貧困な世に生れた。けれども貧困のまま死ぬのは罪なのだ」。(p.63)「私は自分なりの道を歩むのだ。他人が何を言っても語るにまかせよ」。(p.62)著者はいう。「ミンの長所の一つは、昔の苦難を決して忘れないことだ。私は何度も聞いた。私は私の生れ育った所を忘れないと。それを私は好きなんだ。」と。(p.74)ミンはある人と結婚したが、彼は「治安官」になると云う。ミンより三百元も多い給料だという。ミンは結局離婚した。彼はシャイ(Shyness)(p.360-1)つまり生き方として、日本人のいう「脱亜入欧」的な自分となるのを、そして故郷を捨てて「利」を追うのをきらったのだ。ではイギリス人はどのようにして、道德的人間像、民主主義をき

ずいてきたか、次章でみてみる。

二、イギリス啓蒙主義的ユートピアの素描

イギリス精神すなわちイギリス・アイデンティティーをとり上げるのは、自生的に達成された資本主義において初めて、最高のブルジョア文化を立ち上げたからである。それが十九世紀自由主義文化である。自由主義は当時ヨーロッパ全体に及んでいたが、イギリスがその中核となり推進した。その理由は、イギリスが自生的に産業革命をなし遂げた唯一の国だったからである。云うまでもないが啓蒙主義そのものはルネサンスに発足し、渡辺一夫氏の熟慮の末の言葉によるなら自由検討の精神というのを軸にすえており、従ってユマニズム(ヒューマニズム)と云うのは、博愛的とか人道的とかという意味だけではなく、かえって「人間が自分で作ったもの、現に自分の使っているものの機械や奴隷にならぬように、歪んだものを恒常な姿に戻すために」自由検討の精神でもって根本の精神をたずね続けることといえる。これは、渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』(一九六四、一九九二岩波文庫)によった。この文庫本に附した大江健三郎「解説」によれば、「当時カトリック教会には確かにその制度内に腐敗したところがいいろいろあり、それが「キリストと何の関係があるのか?」と批判されたのであったとコメントして

いる。(前掲、三七二頁) エラスムスはギリシヤの格言に「狂人は屢々真実を語る」とあるのに寄せて『痴愚神礼讃』(一五二、渡辺一夫訳、岩波文庫一九五四)を書き、いたすら心に面白く、しかしプラトンの学問の精神は貫く形で自由検討をなしおさせた。キリスト教徒はプラトン主義を共有しているとの立場である。「イエス・キリストに対する極めて重大な冒瀆には平気なくせに、法王なり王様なりに関する極めて軽い冗談の為に、その「御厄介になつて食つて居られる」場合には特に、胸ふさがる思いをなさるお方々を見るにつけ、宗教までもが、裏返しにされて理解されているやうに思われます。」彼は自己をたえず批判をしつつも、特定の人間をではなく、人間というものを習俗とくにあらゆる人間の悪徳を批判するという立場を明言している。(三四 五頁)

さて、エラスムスの場合、キリストの真のありかたとユマニテ(人間味)すなわちヒューマニズムとは同じ意味であつた。「それはキリストと何の関係があるか?」の問いは「それはヒューマニズムと何の関係があるか?」の問いと同じ意味であつたからである。(渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』岩波文庫、三五六 七頁) いまりサ・ジャルダン編『エラスムス・キリスト教君主の教育』(ケンブリッジ大学出版局、一九九七・二〇〇七)⁽³⁾によつてその含む意味を、つまりなぜかをここで必要な限り、立ち入ってみよう。(引用は断りない限り本書による。)

「キリスト教君主の教育」は、啓蒙された支配者にあてたる一連の教

訓や警句の形で呈示されている。「キリスト教徒であること(Christianity)とは、実質的な中味からみて、高度な道徳的に進んだ態度と法の支配(「法治主義」)の問題である」(P.xi)とされている。そこで政治のバック・ボーンとして有徳の行為を強く主張するとともに、自らの立場を支持するに絶えず事実に基づく論法をとることを強調しているのである。さらにもう一つのエラスムスの立場は、生涯の平和主義で従つて戦争と暴力を忌避していたことから、キリスト教君主にも平和の堅持と最後の手段としての戦争をさけるよう勧めている。(P.xiii)そこから「君主には学修が不可欠である」とか、「君主にあつても、特別に哲学的に論議すべきことである」とされていた。(P.xix)他方で、腐敗やへつらいをもつて、キリスト教に(人間性に)かかわらぬ事柄と伝授している。これはまた、「君主はもし真の君主であるなら、彼は一種の神の代表なのである。神は本性上善であり慈善にとんだ方なのだ。プラトンは何人も神が悪徳(evil)の元だなどと云つのを許さなかつた」とも語つた。(P.53)最後にエラスムスの見解として以下のことがある。「君主が臣民に権威を行使することをなし得るのは臣民の同意があるからだ。臣民の同意がなくては、君主は大いなる人間(Great Man)となりえようか? したがつて、あらゆる点で道徳的に善を認識し追求できるよう教育をつける必要があるのだが、それは人民の為に正しい判断をし、推進できるためである」(P.viii)としている。臣民に敵意を示すならば敵

に仕返しはできない（P.107）とも、のべている。人民あつてはじめて君主はある、との趣旨である。

ユマニストの第一人者、王者（リュシアン・フェーヴルの言）デシデリウス・エラスムスの紹介は終るが、ルネサンスに続く宗教改革の結果の影響について、後考のため付言したい。フェーヴルは次のように云つ。「自由検討の名のもとに、哲学の分野並びに信仰の分野にまで、民衆の主権が及んだ以上、哲学体系と同じく信仰箇條の統一ということもありえなかつた。」宗教改革とは分解の酵母であり、歳月のたつに伴い神学はいよいよ四分五裂し教派の数は増加した。民衆は恐怖のモラルから自由のモラルへと移行した。リュシアン・フェーヴルは、かくて、十六世紀・それは偉大なる世紀と唱え革命の精神の興起をたたえた。（『フランス・ルネサンスの文明』二三〇 一頁）

さてここで、「啓蒙の時代」という一つの提案を述べてみたい。西ヨーロッパにあつて、啓蒙主義の意味は信仰上の神と理性とをどう調和させるかが神学上の問題となつていた。それはユマニズムの自立化が哲学、文芸、宗教をして民衆の誘導の立場から民衆主体へと転換させて行つたからであつた。歴史上啓蒙主義の時期は十七世紀末から十八世紀一杯といえようが、それは「下からの啓蒙」と特徴づけることができると思つ。それまでの期間つまりダンテから、宗教改革、科学革命をへて、自己疎外を回復した個人主体の主権的アイデンティティー（独立した個人）の連

帯による革命が、イギリスではピューリタン革命をなし遂げた。そして啓蒙主義の時期となつた。それは「下からの啓蒙主義」であつて、主権意識ある個人主体とその連帯の社会を宗教的姿態を帯びつつ培養した。啓蒙主義的キリスト教はそれゆえ理性の限界によつて、いわば下から規定されるものゆえに、超越的に、前提的に神の存在を認めるのとは全く異なつてくる。「啓蒙」を上からと下からに区別したのは、右の交代過程があるものと思考した故である。（小田恒『キリスト教の歴史』講談社、一九九五を参考とした）

上からの啓蒙と下からの啓蒙主義

ダンテ・アリギエリ（Dante Alighieri, 1265-1321）は有名な、そしてエクスピアと並び称される文芸詩の傑作『神曲』（Divina Commedia）をもつて、恒久に知られている。元それは喜劇Commediaとして全文ラテン語で発表されたが、十六世紀に、Divinaが付けられたといふ。（一五五五）ここにダンテを短い余白ながら敢えて紹介するのは、近代人の主体形成と道徳的立ち上げ合一化過程の出発がここにおいて劃されており、それが近代社会とその後までも教導するからである。実際、ダンテはごく長く広く普及していたし、今もしている。

さてG・ホームズ『ダンテ』⁽¹⁾ 記者解説（二〇七頁）に次のように述べ

られていて、「ダンテにおいてはベアトリーチェと新プラトン主義は一つになっているが、その裏づけとなっているのが黙示思想であり、その純粹化された恩恵の姿によって教会の刷新（つまり純化）がめざされている。」と。このところを、『英語のダンテ』は以下のように要約している。ベアトリーチェ（Beatrice）とは有名なダンテの恋人であり神の化身である。また、新プラトン主義とはいわばギリシア精神で、プラトン、アリストテレス、キケロ、アウグスティヌスときてダンテに及んだ。新プラトン主義の再現こそルネサンスの語源である。プラトニック・ラブは純化されたキリスト教的慈恵（Christian humility）に一致する。「キリスト教精神（Christianity）は知識の体系ではなく、まこと身につけ、営まれる技巧」（Dante in English, P. lxxx）である。つまりモラルである。ダンテはベアトリーチェの高潔な人物化のとりなし（神の支え）により、女性性はギリシア社会の奴隷からルネサンスの（男女間の）平等な人間としての愛を結実する。これを普遍といい、至高の境地に達した。「あなた私の罪を氷のように溶かしてしまわれた。」（P. cxiv）罪とは、人間は社会のおかげで、生れ、育ち、働き、結婚すること。つまりお陰げで、生れ、自らを立てることをさし、すべての宗教はそれぞれに、それに責を負わせる。原罪はかくて、はじめの腐敗、背徳、退廃から自己規制をもって宗教的力に支えられて「主体」を立ち上げる。つまり個人が主権を内在する。これを啓蒙という。ダンテは「神曲」において、地獄篇、煉

獄篇、天国篇（訳文、寿岳訳）と巡礼して自覚し、ベアトリーチェに支えられて高めてゆき、普遍に至る。最後に長文であるが解説の終りのところを引用する。

「私たちが地獄篇で出会つすべての罪はダンテのものであり、それはまさに彼が夫々の罪人に語っているものだ。彼がそれらの罪をすべて犯しているとの意味でなく、またすべての個人が内なる自己（主権）を視すえた（自己認識した）、としているのでもない。そうではなく、人間的連帯の感覚を身につけるとの意味である。それは「原罪」original sinの理論（教理）によって示されている。（別言すれば、マルクスの「種的存在」の概念で示されている。）そのおかげで、すべての人間は誰に対しても、他人扱い（よそと）はしない。そして私たちが認められているように私たちが

第1表 ダンテからの引用詩人（英国）

年 代	作者数
1300 ^(年代)	1 ^(名)
1400	1
1500	7
1600	4
1700	26
1800	36
1900	25
計	100

引用者調べ

「誰をも」認める。（P. cxiii.（）は引用者）さてE・グリヒスとM・レイノルズ編『英語のダンテ』⁽⁴⁾（ペンギン・ブックス社、二〇〇五年）は、ダンテ『神曲』から引用し英

訳した、詩的作品の作者とその引用部位を、年代順に列記したものである。第一表によると、それは十四世紀から二〇世紀（現在まで）間に、百名に上り、とくに、十八世紀以降多くなっている。（うち女性三、米國一）引用の篇は地獄が最も多く、ついで煉獄、天国となっていた。チヨースーからミルトンやグラッドストーンらも含め、名声のある詩人は殆んど含まれている。しかし「農夫ピアス」やシェクスピアは含まれていなかったが、ダンテからの引用をしていない為と思われる。それでも百名にも上るのを調べて紹介されている。文芸の中心は詩による劇作が主であり、書簡も重要であつた。次項は、「上からの啓蒙」の具体例に、チヨースー『カンタベリー物語』を主にとりあげ、そのあと、シェクスピアその他作家を加えて説明を試みよう。

初期文芸作品にみる啓蒙

まず、チヨースー『カンタベリー物語』（梶井迪夫訳、岩波文庫（上中下）（一九九五、二〇〇三））をとり上げてみる。ジェフリー・チヨースー（Geoffrey Chaucer 1343? 1400）の主な詩的劇作品である『カンタベリー物語』（The Canterbury Tales, 1387 1400）は、英文学史のうえで中世文芸作品の傑作とされている。チヨースーはロンドン生れでそこで育ち、宮廷人ないし公務員であつたと推定されている。邦訳の訳者梶井迪

夫氏による人物紹介（上巻）と「カンタベリー物語」について（下巻）の詳細で行き届いた紹介文は、大変わかり易く、また文学的内容の分析的な説明となっている。ここではそれらに依りながら、啓蒙的役割をも担っていることを指摘してみたいと思う。梶井氏の解説によれば、物語りは「微妙なヒューマナーや軽い諷刺」を交えながらも「経験（実験の意味である）による証明」に立ち、「楽しみと教訓」とをもつものになっている、と特徴づけている。（前掲、下巻、三〇一頁以下、とくに、三七三三五頁）ここで、さらに、E・グリフィス、M・レイノウルズ編『英語のダンテ』（二〇〇五（前掲）一頁からチヨースーの英文学史上の位置についてのコメントを引用したい。「ダンテからチヨースーによる翻訳は詩の最も早い英訳のなかに入る。……神曲の最も古い（部分）写本とされているものはジェノア（Genoa）（一三三六年）のものでされているが、たまたまチヨースーが宮廷の用事でジェノアを訪ねたのが、一三七二三年であつた。彼はフィレンツェへも訪ねたが、ダンテはその頃崇敬をえてイタリアに二三七八年戻つていた。チヨースーは明らかに「神曲」全部を知つていた。そしてその幻想的範囲と哲学的深さはかりでなく、その文体や詩作に感銘を受けていた。……J・A・Wベニット（Bennett）は正當にも、「英語の詩作がヨーロッパの詩の主流に加つたのは、チヨースーの神曲の読みのお蔭である」とのべている。この読みはミルトンに至るまで、比肩するものがないのである。」と。チヨースー

一の著書にダンテからの引用は、この『英語のダンテ』によると、七ヶ所からなされ、それがかがけられている。そのうち『カンタベリー物語』よりは三ヶ所が中世英語のまま引用されている。注に現代英語が補われている。

さて、『カンタベリー物語』は、ある年の春四月、ロンドンの旅籠屋に出会った二九人の巡礼者たちが、カンタベリーへ巡礼する道中に、一人ずつ話し同行者が聴き手となる、そのいわば説話集の形でまとめた本である。現在は二十四の語りが含まれている。巡礼者は当時のほとんどすべての階級を代表する人々が選ばれたといわれ、その当時の社会の縮図となっている。巡礼という形で仲間意識のある一つの社会をつくっている」と看なされている。(訳書(下)解説による)語り手のなかに修道僧と、女性二名が含まれ、詩人(チヨースー)も語り手に二回現れ、宗教色ある話題を語る。巡礼ということがただの観光旅行ではない以上当然といえる。一番終りの「教区司祭の話」には、巡礼の順に罪から自覚そして回復へといった順ではないが、七つの大罪にふれ、それからの救済にふれた語りがある。けれども一つ注意されるのは聖書解釈的に追求されたのではなくて芸術的であり且つ人間的なあり方に力点がある、とみることができる。チヨースーの主題は愛とくに男女の愛ことに結婚にしている。その場合邦訳者梶井迪夫氏の説明に副うのを私はえらぶのである。つまり宮廷愛(権威主義的愛)は否定され、人間的な愛は「肉体

的性愛で結婚を前提としない。」「キリスト教のモラルからいえば不法である。」「しかしチヨースーは「経験の上に立つ男女の結婚の世界に満足を見出したように思われる」とのべられる。(前掲(下)巻三一八二〇頁)ここは勿論論議のあるところである。ラテン語の「愛はすべてを征服す」(邦訳(上)二二頁)というのはキリスト教の教義だとしても、行きすぎであると思う。しかしベアトリーチェ(神の化身)の愛によるダンテの得心と、恋愛とは宗教の支援による平等の人権の実現の上に成立するのであるが、かと云ってキリスト教指導の人間の主体の実現でなくて、人間的あり様の上に愛はなり立つという意味であったと思う。しかしそれが宗教的支援がある限りで女性優位が成り立つのである。これは今日においても同じである。この点で、同時代のラングランド『農夫ピアス』はパラダイスに至る(愛が成立する)のは宗教指導性のものであると理念されるとすれば、ここに個人主体の自立的達成の挙例にはできないのである。この項の終りとして、巡行の語りの一例に「バースの女房の話」をとり上げておこう。この女房は機織の熟練した明るく活発で、恋の手練手管にかけても心得ていたとされている。またヨートルパのあちらこちらの旅行の経験ある方でした。この人は五度も結婚をしたのですが、それが話しの中に出てくる訳です。その五度目の夫婦の生活は、様々ないきさつのあけく愛で結ばれた生活を送ることになった。そして長生きを祈り、「妻の指図」をつけるという、女性上位をみとめ

ている。以上が啓蒙的視点からの語りの概要である。最後の語りでも終りには女性優位があつたが、それは前述のようにダンテの場合と同じゆえであると思う。ここで一つ、のちのため付記すると、啓蒙のねらいは自主自律の主体つまり人権をもつ主体づくりであるが、男女平等の個人主権がどのように扱われてゆくかは、やはり問題のあるところと思う。とくに愛による性交以外の女性の性交は人権の否定でないかと考えられることを述べておきたい。

文芸作品にみられる啓蒙的要素

詩聖シェイクスピアの啓蒙的側面

ラム姉弟作「シェイクスピア物語」（安藤貞雄訳）岩波文庫（上下）の解説に安藤氏は次のように書き始めている。「イギリスの詩人、コーリリッジは、シェイクスピア（一五六四—一六一六）のことを「千万の心をもてるわれらがシェイクスピア」と呼んでいます。「人間の諸々の営み」でシェイクスピアが描写していないものはないと述べている。今日はさらに進んで、「これが英国」といえば、まず、シェイクスピアを想い浮かべる盛況でしょう。現に、〇八・九・二七日のNHK・TVの報ずるところでは、立川市において、青年たちが、東京シェイクスピア・カンパニーを立ち上げ、その主催で、「お気に召すままに」ともつ

一つ、上演されると伝えている。日本にはすでに定着したシェイクスピア劇と研究の伝統が先学・俳優によって築かれてきた。ところで、二〇〇五年九月一六日朝日新聞に、河合祥一郎氏（東京大学助教授・当時）はシェイクスピアの四〇作目の作品「サー・トマス・モア」が英国のロイヤル・シェイクスピア劇団（RSC）によりストラットフォード・アポン・エイヴォンのスワン劇場で上演中（公演名は「トマス・モア」）で、これでシェイクスピアのすべての作品（四〇作目）が上演されたことになる伝えている。これまで三七作であつたところへ、二〇世紀末に三つの「新作」が発見され加つたものでそのうちの二つが「トマス・モア」であつた。モアとはいふまでもなく「ユートピア」の著者、エラスムスの親友である。歴史家や社会科学研究者には、シェイクスピアがモアについて語っているのは、何ともうれしいことであろう。それにしても、時期が十六世紀後半といえ、女王エリザベス一世の下、イギリスが近代へすべり出したスタートのときである。しかし簡単にいえば、中野好夫氏の言葉を借りると、「イギリス・ルネサンスのめざましい開花期であつた」。経済的政治的には、スペイン無敵艦隊を下して飛躍のとき、また宗教改革と重なって、旧教、新教のざわめく時期でもあつた。（中野好夫『シェイクスピアの面白さ』新潮選書、一九六七・平成十三年版八九 九〇頁）

さてシェイクスピアの作品を種類別に区分すると、喜劇、悲劇そして

ロマンスになる。ロマンスとは喜劇のうち著しくロマンティックな特質をもつものとされる。これは筋のことで、はじめ不幸だった主役が最後に幸福になれば喜劇、はじめ幸福だった主役が不幸になって、死んだりすれば悲劇となる。これはダンテ『神曲』が喜劇であるのもこの意味であるという。『シェイクスピア物語(上)』の訳者解説、三三九頁による。)ですけれど、この筋に加えて、シェイクスピアのルネサンス精神(モアとの係りもふくめ)を加味すれば力点はどうなるか? 実際私がストラットフォードで参観したとき、俳優は黒一色の衣装で背景もない、唯々耳できくだけに一驚した経験がある。そこで訴えているのはラロック(石井美樹子監修『シェイクスピアの世界』創元社二〇〇四年原文一九九一)によれば「それは苛酷なまでの深く鋭い人間洞察」(序文)である。それは全く、ダンテやチョーサーと同じ視点にしばられるのではないだろうか、これがここでの問いである。では『ハムレット』(野島秀勝訳岩波文庫二〇〇二年、原文一六〇〇一年)⁸⁾をみよう。これはいうまでもなく、シェイクスピアの最高傑作とされ代表的「悲劇」作品である。

「ハムレット」は、王子ハムレットが亡父つまり先王の悲劇の復しゅうを果そうとする筋が主な流れとなる。だがもう一つの柱には、王子ハムレットとオフィーリアとの恋愛関係がある。オフィーリアは王子が狂乱になり果て愛を裏切ったと思い、「まことの愛」(the love)ゆえのこと

からして自ら死に至る。(岩波文庫 一三三頁)ところが王子は、オフィーリアにたいする愛は「たとえ幾千万の兄がありその愛情すべてを寄せ集め」ても「おれ一人のこの愛」にはおよぶまいと云い放って、「まことの愛人」(the love)(前掲、二八七頁)を、説いている。やがて自らの死もそのつぐないである。シェイクスピアのいう「まことの愛」とはどのように理解されるのか? ハムレットの有名なセリフ「生きるか、死ぬか、それが問題だ」(前掲、文庫一四二頁)⁹⁾には、後者の愛(ハムレット・オフィーリアの愛)の問題をも、含んでいたのではなからうかと考えてみたい。

シェイクスピアの筋をこえた課題意識を直載に観る最善の途は、彼の詩(ソネット)によるべきかと思う。『対訳シェイクスピア詩集』(柴田稔彦編)岩波文庫二〇〇四年にはソネット集はじめ重要な詩が含まれている。編者は解説(二八七頁以下)で、シェイクスピアは、何よりもまず詩人であったこと(及び英文学において詩のもつ意義)にふれている。さて、この詩集は全編が愛とくに男女の愛のことで一杯になっており、その諸相と本質が深くえぐられ全面的に描かれている。相思い合う二人の愛は互いに一番大事で心を煩わす唯一人なので、「ぼく自身やぼくの中に一切があなたのもの」となっている。「ぼくがあなたの虜になっっているのだから」なのだ。(二二七頁)愛し合う二人の状態を形容される。(二四頁)けれども欲望(地獄)は強く理性は弱いので制御でき

ない。卑劣、犯罪、退廃、放埒がはびこるのが常となる。『ルークリース凌辱』の中で、妻ルークリースはあるとき、夫の留守にその友に凌辱をうけるのである。妻はこれを恥ぢ、報復を依頼して自害する。ルークリースはなぜ自害したか？解説によると、これは「昔から問題」にされてきたという。そして一つは名誉観が自分の恥辱に加わったこと、あるいはまた、罪の意識をもつようになったとされているという。（二四三頁）以下私の感想をのべるが、その前に、二つの参考を記しておく。一つはシェイクスピアは、ここで「だが夫人（ルークリース）」は命より大切なものを失った」（二二七頁）と述べていること。もう一つは、カール・マルクスの末娘は、夫がかくれ恋人をもったとき、離婚し、自殺した事実を想起したい。

男女の相愛は互いに合一をなす。互いに相手を持ち合う。それは肉体に限らず人格すなわち人権であり、主権としての人間的實在である。それは人類史上はじめて個人主体としてルネサンスにおいて誕生した。それに女性にとり性（セックス）は人格である。愛なきセックスは人間＝人格・人権の否定ゆえ、性の凌辱（商品化を含む）は命より大切なものを略奪・殺害する事となる。ダンテ・ベアトリッチェの愛は、ハムレットとオフィーリアの愛と全く同じなのである。⁽¹⁰⁾

十八世紀イギリスの運動としての啓蒙主義

十八世紀啓蒙主義は啓蒙的作用を保持しながらも極めて多彩に、また急激な転換的分立を遂げたと思われる。このこと自体の知覚的突出はここ二、三〇年の人文・社会科学の格段の発達の結果といえる。だがここに入る前に、十六世紀と十八世紀の間にあるイギリス革命について觸れねばならない。それによつて啓蒙作用にどんな影響が加わったか、に注意を払つ必要がある故である。

イギリス革命は多面的な側面をもち多様な影響を、政治、社会、文化と生活に及ぼしたが、ここではとりわけ国家と個人の側面をとりあげる。

ミルトンについてのクエンティン・スキナー教授の研究によると、議会側（とりわけ平等派による「人民協定」初案）は、ミルトンの見解によると、「自由共和国」が一つの柱であつた。それはトーマス・モア『ユートピア』（一五一六年）以来のもので、その趣旨は「市民的統治のあらゆる問題」において、人民の団体が「彼ら自身の手の内に正義」をもつことを可能にし、その結果「かりによく統治されないとしても、彼ら自身以外だれも非難の対象とするものはない」のですと説く。またこうも述べる。「すべてのコモンウェルスは一般的に、……もしもその社会が必要不可欠なもののいくつかを、……持つことが出来ないのであれば、

……結果としてコモンウェルスとも、自由とも考えることは出来ない。」自由な政府は、なんらかの優越する権力によって命令され、変更を余儀なくされるのが当然となった瞬間、その本質を失う」と位置づけている。⁽¹¹⁾

自由な共和国を発想し支持し創出する主体は、いうまでもなく自由な個人・近代的主体性であった。クエンティン・スキナー教授は「ミルトンと自由」という卓越した論文において、「自由な個人とはいかなる意味においてか？」にこたえて縦横に論じている。⁽¹²⁾ そのなかから、一部を引いて参考としたい。ミルトンの以下に示す見解についてスキナー教授は付言し、「ミルトンの個人的自由に関する見解（vision）は、我々の権利の行使に当って少しも妨害されることがあってはならない理論根源（place）として理解されてきたことが、しばしばであったのも、驚くに当らない。」とし、最近では英国首相ゴルドン・ブラウン氏が二〇〇七年一〇月、ウエストミンスター大学で、「自由について」の題で講演したとき、ミルトンの見解をロックの見解とともに紹介した事実を紹介している。

(一) ミルトンは個人の自由全体は二つの要素よりなるとし、次のように云う。一つは市民的自由であり、他は精神的自由である。それがためには、自分の望むように選択し行動できるのでなければならない。われわれは強制的に行動を妨げられてはならないし、また同じように、意志に

反した行動を迫られることがあってはならない、と。

(二) では自由人であることはいかなる意味においてか？この問いに次のようにミルトンは答えている。それは本質的に「自らが」自分自身の主人となることである。……あなたがあなた自身の主人になるには、二つのことが満たされねばならない。第一に、自己自身（の欲求や感情）を支配する（mastering）ことに成功することである。つまり、いつも理性の指示にしたがって自分の感情や行動を統制できなければならない。もしあなたが、自らに勝手に振舞うことを許すならば、盲目的感情の赴くままとなり、その行動は自由の表現ではなく、たんなる放蕩に陥る。それは自由の表現とは全く異なる。自己統制を達するには、全面的な礼節を備えた行動が決定的要因である。自由人になるもう一つの必須条件は、他人から支配されてはならず、それゆえ他人から奴隷化されてはならないことである。

(三) 自治的共和国においてはじめて、自由人として生活する希望が保たれよう。そこでは自らの積極的同意によってできた法律によってのみ支配（rule）されるからである。

(四) われわれが自由人である立場を失うのは、恣意的権力（arbitrary power）に従うようになったためである。その結果われわれは臣従と服従におとしめられる。これに反対する自由人から成るものこそ、コモンウェルス（自由共和国）なのである。そして自己の自立的意志

（autonomous will）によって行動することのできる人のみが自由人となるのである。

十八世紀啓蒙主義の多様化と運動化

グレゴリ・クレイズ（Gregory Claeys）の画期的貢献

G・クレイズ教授の『イギリス啓蒙主義のユートピア論』（ケンブリッジ大学出版会、一九九四、二〇〇三）⁽⁴³⁾は、十八世紀イギリス啓蒙主義の網羅的探査の上に立つて特徴付けを行った画期的貢献であると思う。それはユートピア思潮の中から選出されたものであるが、ユートピア思潮と反ユートピア論を合わせると、七五篇の多きを数える。（第2表をみよ）世紀末にやや集中があるが、年次的にはほぼ平均的に分布していた。今回このような膨大な

第2表 18世紀英ユートピア論
稿年次分布

年 代	論稿数
1700－20	14
21－40	15
41－60	12
61－80	15
81－1802	19
計	75

引用者作成

ユートピア関係文献を調査し紹介されたのは初めてである。しかし今日に至るまでこれらの文献は、ダニエル・デフォーのロビンソン・クルソー、スウィフトのガリバーの旅行記の二篇を除いては殆

んどとり上げられたことはなかったといふ。二、三、四〇年間に急激に研究は累積されたし、それが紹介してある。（Ibid., bibliographical note, pp. xxxiii-xxxv. をみよ）けれどもなせ長期にわたって無視され続けたのか問われなくてはならない。さて内容に入る前に、紹介なしになるけれども、代表的文献七篇の原文を掲載してあるので、それぞれの著者と書名とを掲げておく。それぞれの詳しい紹介は省略した。

1. () *The Island of Content* (1709)
 2. () *A Description of New Athens in Terra Australia Incognita* (1709)
 3. David Hume, 'Idea of a Perfect Commonwealth' (1752)
 4. (James Burgh), *An Account of the First Settlement, Law, Form of Government, and Police, of the Cæsares, A People of South America* (1764)
 5. (Thomas Northmore), *Memoirs of Planetes, or a Sketch of the Laws and Manners of Makars* (1795)
 6. William Hodgeson, *The Commonwealth of Reason* (1795)
 7. () *Brice's Voyage to Naples* (1802)
- 注 () は無署名、[...] は確認、3 のヒームは岩波文庫「市民の国について」(上) 小松茂夫訳に、掲載されている。一九六二、一九八二改版。
- 右の七冊（論文をふくむ）は「どこにもない所」(Nowhere) をあげ

ているが、もしくは、ガリバーのように「小人国」とか船旅で偶然ついたところなどである。例えばマカル(5)は「ユートピア」の隣国、(4)のテサレスもロビンソンの近所、(2)はオーストラリアの「知られていない処」(Terra Incognita)である。つまり共通した特色として「知られていない処」をえらんでいる。何故そうするのかというに、経済、政治、道徳へ人間関係し、とりわけ結婚・家庭・女性のあり方などが、今や自由個人、個人的主体性(主権者)の実際の立ち上げの上で、それと調和した新しいあり方が求められ、その合理性が追求された。しかし障りのある論述はさけているし、匿名にしたりした。現に(6)の著者は不敬の廉で投獄されたのである。それゆえ、あてこすり(または風刺)(Satire)の手法を用いて、人間の腐敗(自己抑制の無能)や社会・政治などの欠陥や無能を改良し、また、より理想的(完全な)状態を討議し、論述したりした。したがってユートピア論には歴史的連鎖と発展をふくむのであるが、大よそ三つの分野に及んだとされている。

(G.Clueys, op.cit., P.vii) 一つは啓蒙主義の発展、二つ目は理想社会ないし一層勝れた社会の模索、三つ目には共和制度のモデルの探求であった。一つ目は腐敗(Corruption)と云う言葉が内容的にさまざまに拡がってきた。しかし他方でその根元が性的退廃・売春に求められるようになった。貨幣や営利などは忌避されていたのが緩み、さらに貧困が腐敗の原因とされて平等が強く要求されてきた。他方、自由個人は自立自助の立場か

ら独立が目標とされた。英語のCorruptionとIndependenceが対目標となつた。二つ目の方は、市民的社會つまり文明化(Civilized)社會が自治的あり方とされてきた。そして、いわゆる役場の職員(Civil servant)は市民による交代が目ざされてきた。三つ目は憲政や共和政治のあり方が政治制度のモデルとして探求されて福祉社会的側面が加味されるようになっていく。

さて、ここで一つの問題が生まれてきていることに注目したい。ユートピア論が現実的具体的扱いが多くなるにつけ、反ユートピア論議が大変多くなり、またより良き社会ないし勝れた社会(現代より先の社会)の論議はユートピア範疇外となり易く、またモデル的共和主義も同じ傾向を示した。そこで反ユートピア論が合わせて五〇篇を数えるに至つたという。啓蒙主義から反ユートピアやその他社会科学(とくに道徳哲学)が分立して行く傾向を辿っているのである。この点を次にのべよう。

啓蒙主義の急激な突出と性格転換

十八世紀啓蒙主義の突発的興起とその同時的変質とを示唆したのは、多分ミシェル・フーコーであり、またそれに呼応したのは英米をはじめとした欧米の研究者であった。従来それはスコットランド啓蒙主義と把握されてきたのであるが、その課題は拡大して把握されるのが適当であ

らうと思う。つまりヨーロッパ啓蒙思想を土台としたイギリス啓蒙主義の成果を問うべきであろうと考えている。⁽¹⁵⁾そして、その動態のなかにスコットランド衝動を位置づけるのである。

ではスコットランド啓蒙主義飛躍のバネは何であつたか。

スコットランド啓蒙主義知識人グループの急速な興隆の担い手は、主な人をあげると、デビット・フューム（一七七一―一七六六）、アダム・スミス（一七二三―一七九〇）およびアダム・ファークソン（一七三三―一八一六）などであつた。彼らの背景として二つのことが指摘できよう。一つは知的伝統に恵まれており、ミルトン（一六〇八―一六七四）、ロッキ（一六三二―一七〇四）、マンデヴィル（一六七〇―一七三三）、フランシス・ハチスン（一六九四―一七四九）らがあり、海外には、マキアヴェッリ、モンテスキュー、ルソー、ヴォルテールなどが立ち上がつていた。もう一つはスコットランドの政治的立場の変更があつた。もともとスコットランドには王室も議会もあつたが、一六〇三年王室の合邦、一七〇七年に議会の合邦（Union of Parliaments）があつた。とくに一七〇七年合邦によってグレート・ブリテン帝国（United Kingdom of Great Britain）が成立したとされた。スコットランドは長い間の独立した存在を失つたが、他方、米国との通商貿易は急激に増加し、イギリス産業革命の先端を担つて発達を示した。こうした環境にあつたスコットランドは、高地地方のいわば遅れた地帯のあり方と低地地方の知的に進み合邦の恩恵をうけな

がら、ともに緊張した精神的対抗感情をデコにして、ともにイギリス市民としての立場つまりアイデンティティーを知識人としての成果によって高めていつたのである。この筋道を一身に辿つた流れを、ファークソンとかれの名著『市民社会史論』（一七六七）の名著発行までの辿つたなかに、みる事ができよう。今、ファニア・オズガルツベルガー大学教師の解説をたよりに、一部分ながら肝要なところを紹介したい。⁽¹⁵⁾

アダム・ファークソンは一七二三年に生れた。それはスコットランドの低地地方と高地地方との境界にある、パースシェアのロジライト村であつた。父はピュリタンのプレスビテリアン派修道士であり、母はアルギル伯の遠縁に当る人であつた。青年期にギリシャ語、ラテン語と神学になじんだ。多くのスコットランド啓蒙主義知識人と同じく、彼の思想はプレスビテリアン教養と古典学によって育つた。しかも特別の啓蒙主義思想家に立ち上げたものは、高地地方のゲール語会話協会との交りと、低地地方の閩族の新しいグループ、洗練されたグループそしてイギリス化した低地地方人との出会いが役立っている。ファークソンはセント・アンドリウス大学をへてエデンバラ大学へ進んだ。そこで彼は青年神学学生サークルに加わつたが、そのグループは数々のすぐれた専門職で有名な人々を生んだ。彼らがスコットランド啓蒙主義のエデンバラ中核を形成することになった。

彼の経路を大きく区分すると、第一は、一七四五年ジャコバン主義反

乱とその失敗後のつぎ。第二に、一七四六 五四年間、スコットランド市民義勇軍 (Scottish militia) の兵士として加わり、また政治的意味をもつ牧師 (Preacher) としてつとめた。この経歴は、スコットランドの他の知識人、とくに、ヒュームやスミスとは異なつた経験であり経歴だつた。第三には、ヒュームの支持をえて、エデンバラ大学の道德哲学教授となり、学生生活に入つたことである。そのなかで前掲の著書をあげた。

このなかで特に関心を寄せられるのは、ジャコバンの反乱の影響が、スコットランド啓蒙主義にどういう現れかたをしたかであろう。オズガールツベルガー氏の解説もまさにそこにあつたのである。ジャコバン反乱がある種の人氣があつたのは、スチュアート王朝がスコットランドから出ていること、また長い歴史をもつていて地域文化に寄与していることもあつた。しかし一七〇七年合邦後、ブリテン島自体、産業貿易の急速な発展がおこり、スコットランドもそのなかにとり込まれていった。そして技術工芸の発達や工場・経営が増加し、反面、社会面での社会的地位の変化、とくに貧困と没落がおこつて来た。とくに道德的規準も大きく変わつてきた。こつしたなかで、スコットランド啓蒙主義知識人は、ジャコバン反抗によつて、支持することはなかつたといえ、知的発展のテコとして、イングランドにおいづくことに激しく刺激され向つた。とくにアダム・ファースンは高地地方の文化的進歩の積極的努力に加

わつてきたので、「市民的徳行」のあり方にも力強いあり方が強調された。しかし啓蒙主義知識人の知的開発における視点は、地域課題に局限されたのではなくて、ヨーロッパ的、普遍的な学問的進歩に視点を高く向けていたのである。

人類社会の発展モデルを探る方方は、一つには「進歩」の概念を知ることであり、もう一つは「変化」ないし「転換」の視点の導入であつた。もちろん呪術からの解放と合理主義とはすでに用意されていたが固定化された途は退けられていた。「進歩」についてはモンテスキュー「法の精神」(一七四八)「ペルシャ人の手紙」(一七二二)によつて政治的自由の諸類型の紹介とされている。モンテスキューのヒューム、スミスそしてファースンに与えた影響は非常に大きかつたとされている。しかし、三人それぞれのつけた影響のちがいはあつたのである。ファースンは高地地方の近代化に重く係つただけ、他の二人との違いは明瞭であつた。

さらにも一つは、マンデヴィル『蜂の寓話』(一七一四)であつた。私的個人の利益追求が、なぜ公的富の蓄積へと転換され公共圏の安楽と自由の増加になるのか、というのである。そこには個人利益追求の成果が性格を転換する微妙なメカニズムがある。ファースンの「腐敗」の概念も再考され、真の道德的危険は富(貨幣)ではなく政治的怠慢とされ、奢侈や富裕さえ道德的低落に導くとはされなくなつた。市民的価値

は彼によつて新しいエートスによつて調整された。彼は社会を市民化（文明化）する説明に當つて、ルソーの財産化とは異なつて、「通商の連帯と公共的徳」においた。彼にとつて市民社会とは「政体」そのもので、これまでの意味以上に「歴史」そのものであった。つまりマルクス、ヘーゲルとはちがひ、市民社会の中に国家がふくまれていて、両者を区別するドイツ学派と決定的にちがつていた。

以上のべたことをまとめると、スコットランド啓蒙主義知識人は、道徳哲学という新しい学問を社会科学として立ち上げつつ、イギリス啓蒙主義に同一化し、アダム・ファースンの場合は、「市民社会史論」において社会学の創立と評価されている。つまり社会科学の一分野の自立である。同じくヒームは啓蒙主義の指導的先達として近代哲学の分野の設立、さらにアダム・スミスの場合は、「道徳感情論」（一七五九）と「国富論」（一七七六）という不朽の著作を仕上げ、経済学を確立させた。⁽¹⁶⁾かくて、学問は宗教と政治とから分離されて、自立した知識分野となった。

ベンザム・「統治論断片」における啓蒙主義の揚棄

ジェリミ・ベンザムは一七四八年ロンドンに生れた。父は成功した弁護士で彼もまた早くから法律研究にたずさるべく生長し、オクスフォードに進学した（一七六〇）。間もなくリンカン法院に入り、法廷にも

出、またブラックストンの講義に列席した。ベッカリアやヘルベティスの文献をも読んでおり、一七七六年『統治論断片』を出版している。この本の校正本が一九九七年バーンス教授とハート教授の編集によつて出版されたのを機に、ロス・ハリスン（ケンブリッジ大学哲学講師）による斬新な解釈が提示されたので、これによつて一部分のみに止るが、紹介してみたい。⁽¹⁷⁾本邦の研究の恩恵あつてはじめてゆるされたことは云つまでもない。⁽¹⁸⁾ロス・ハリスンも過去の研究に立つて、大坦に問題提起をしている。このことは編集者も高く評価している。

ベンサムはこの『統治論断片』の序文（Preface）に「われわれの住んでいる時代はいそがしい時代である。知識は急速に完成に向つて進んでいる。自然世界ではとりわけ、すべて発見と改良にあふれていた。」（三頁）とある。たしかに産業革命、アメリカ革命、フランス革命と集中し、勢いにみちたときであつた。ロス・ハリスンはまた、ベンサムのその原稿に「人々はまず、法の分野において、権威者と先輩の知識の束縛から抜け出すために招かれた、これが最初の出版物である」と書いてあるのをとりあげ、「それは若い人の本である。それは新鮮な本であり、エネルギー、アイデアそして希望にみちて新鮮なのだ」と紹介している。これが解説の冒頭の文章である。新しい学問の立ち上げには、新しい社会の芽の立ち上げに等しいエネルギーを要することに感銘したい。

さて「断片」は統治論であるがブラックストンの批判の形をとつてい

るが、その実体は自らの発想による自立的本であった。「彼」の思想の主な目的は独立した合理的原則（独立した批判基準）によって法と統治の説明を構築すること（XIII）とされた。そこには多少ズレがあったが、それは読者にバランスのとれた読み易い、出来の良い作品となしたことである。それに加え意図の深く独自の思想を盛り込むのに、引用（footnotes）を本文におとらずに用いて編み込んでいる。ベンサムはそのとき「自らの身代りの思想」（his own substantive thought）として用いたのが功利主義原則であった。「ベンサムは啓蒙主義として知られた十八世紀運動の一部」となり、悪（evil）を量的に相対化し「根底から転覆する感情」（a profound subversive sentiment）となった。「最大多数の最大幸福は善悪の尺度」は功利原理ないし功利主義とも呼ばれ、本文でも示されているように、ヒームから数々引用され、彼に負つことをも述べている。（一一六頁）本稿では法学の部分は省いて、功利原理にしばって紹介したい。

一、一般に批判の基準は理性であるが、理性とは功利と同じことである。功利という語はヒームによるが、彼によると、あらゆる徳の基礎は功利にある。ただベンサムは功利、幸福、快しさ、大いなる幸福（felicity）等は交互に用いていた。つまり功利（幸福）は「活動の」目的であって、正しい行動の指標となる。功利の原則は基本公理にほかならない。善悪は「ここでは質的判断でなく量的評価であり」最大多数の最

大幸福という尺度で計算されるのである。これらの語句はすべてヒームからの引用であり、ベンサムの「発明」では全くない。彼のアイデアを盛り込まれた学問的用具（概念）としての利用である。

二、国家は功利を高め、苦痛をなくすることであるが、最大多数の立場からみて判断されよう。一例をあげよう。罰はつねに悪（evil）に対して課せられる。殺人、強姦、盗みなどは苦痛を齎らす。だが悪が一部におこつて少数が罰せられる心配から、社会一般の人々にそれをさせないような自制への転換がおこるなら、悪はまた「正当」へ転換（conversion）とされる。その意味で「処罰に関する功利主義理論は制止理論なのである」。制止する（やめさせる、すくなくする）のは負の影響を対象とされる。そういう訳で、人が罰せられるのは将来によい影響を期待するためである。また国家に服従するのも国家が最大多数に幸福を齎すからであり、資本主義と自由を支持するのも最大多数の人々に幸福を齎すからである。もつとも国家は「最大多数の最大幸福に至ることをなす、基礎的公理にあるような、なすべきことをなし得る」「自己関心の高い人民」をつくることに使命がある」と、付記している。

三、ベンサムの功利論の一部分の概要は以上の上である。私の受けとりであるが、社会科学の諸分野諸理論の中で、国家、宗教、財産および資本主義の四要素の拘束を受けない理論はベンサムの理論がただ一つであることは、いえることと考えている。イギリスの高校用経済史の教

科書では、⁽¹⁹⁾ 社会政策にかかわっているとされている。それはレセ・フェー
ルの弊害に対してである。ロス・ハリスンは結びにおいて「哲学者は十
八世紀社会を換えようとするとき王政に訴えたが、十九世紀には、人民
に、民主主義に訴えた。これは、ベンサムの原理を、よくわきまえてい
たからである」⁽²⁰⁾と記した。二一世紀には、利潤第一主義にくつわをハメ
て、最大多数を優位にした施策を加えることができるよつぞみだ。

近代の出発とともに啓蒙には道徳をそなえることが必要とされ自己規
制が求められた。そこに立つて人権と民主主義が築かれた。よりよき社
会への道は、まず道徳と人権を備えた個人主体性を立ち上げることだっ
た。しかしそれは長い歴史が必要だった。次項は今日の課題としてその
ことを扱いたい。（二〇〇九年九月九日）

注

(1) サワラ以南のアフリカは二〇〇八年リーマンショック以降不況が深
刻となっている。「ユニセフ」や国境なき医師団の活動が貴重である
とともに情報を提供して呉れる。そのなかで、南アフリカ共和国が近
くサッカーのワールド・カップの開催地となりガーナなど協力し成功
を祈っているが、南アのマンデラ後の状況は容易でない。英語の著書
論文、新聞が集中するのも当然である。本稿では、南アとナイジェリ

アのラゴス市の、両方とも貧困層、というより仕事と雇用のないスラ
ムの現況を紹介した。「ガーデアン」のレポートによった。ここでは
利用したもののほかの参考ものせた。著者（レポートの）名を太字に
したのが、本稿で依存したものである。

宮本正興・松田素二『新書アフリカ史』講談社現代新書、一九九七
峯陽一『南アフリカ「虹の国」への歩み』岩波新書、一九九六
ネルソン・マンデラ（東江一紀訳）『自由への長い道（上下）』日本放
送出版協会、一九九六

Joe Slovo, *Joe Slovo: The Unfinished Auto bio graphy*, London Hodder and
Stoughton, 1995

R. W. Johnson, *False Start in South Africa*, NLR, 58 (July/Aug 2009) Patrick
Bond, In *Power In Pretoria?*- Reply to R.W.Johnson-, NLR, 58
(July/Aug 2009)

・ Chris Mc Greal, *The Rainbow Nation brought low*, GW, 09.5.15.

David Smith, *Zimbabwe back from the brink but recovery reminds Frugil*, GW,
09.6.12. p.3

・ James meek, *Sleeping with one eye open*, GW, 09.6.12. p.25-27

Bruno Philip, *High stakes border games*, GW, 09.6.12. p.28

Ian Rice, *Government has done well for itself but the poor eat 'air burgers'*, GW,

09.7.3. p.9

Tracy Mc Veigh/John Domokos, *Land of duet and despair*. GW, 09.7.3. p.25-27

・ Karin Brulliard, *Unemployment undermines South Africa*. GW, 09.7.24. p.18

・ David Smith/Alex D.Smith, *Protests and Strikes end Zuma's 'honeymoon'*.
GW, 09.7.31

David Baresford, *monument to South Africa's dead revives apartheid animosities*,
GW, 09.8.14. p.9

Xan Rice, *Nigeria offers amnesty and Cash to Delta oil militants*. GW, 09.8.14.
p.12

Mike Davis, *Planet of Slums*, UK, Verso 2006

(1.1) 1.1.1の「真似ることはない」というのは「先進国は先進国、私は私」の態度で、シャイでない(They are shying away)を訳したもの。この言葉を二度用いている。後文に「中国女子が「シャイな態度はとらない」といつの間にか共通しているのでは?」

(2) Leslie T. Chang, *Factory Girls: Voices from The Heart of modern China*, picador or spielgel and Grou 2008, 420pp. なお邦訳は左の通り。

チャン(栗原泉訳)『現代中国女子工友史』白水社、二〇一〇年
参考とした文献は次の通り。

廠家棋、高棋・辻康吉(監訳・共訳一〇名)『文化大革命十年史』(上
中下) 岩波現代文庫、一九九六、二〇〇二年

ベンジャミン・ヤン(加藤千洋・加藤優子訳)『鄧小平政治的伝記』

岩波現代文庫、二〇〇八

大橋英夫『現代中国経済論』岩波書店、二〇〇五

小島麗逸『現代中国の経済』岩波新書、一九九七

陳桂棣、春桃(納村公子、福田雅子訳)『中国農民調査』文芸春秋、
二〇〇五

(3) Lisa Jardine et al. ed., *Erasmus. The Education of a Christian Prince*,
Cambridge University press, 1997, 2007.

なお「Education」の訳は N. M. Cheshire and M.J.Heath の「Paregryic」の訳は L. Jardine の Introduction に Lisa Jardine の注。

なお「エラスムス」平和の訴え(箕輪三郎、二宮敬解説)岩波文庫一九九一がある。(原文一五一七年)この文庫本に「二宮敬氏によるエラスムスの著作活動の三期に分けた見事な解説があり、そのなかで「キリスト教君主教育」の位置づけがある。その中で「キリストの前において万人が自由であり平等である」という原則にたつて、君主と民衆の間に本質的差別を認めていない。」とされる。つまり、哲学・文学による理性的判断力(批判的吟味)、宗教による固い信仰と内面的道徳規制、それに絶対平和(暴力・テロの絶対拒否)は、現在の国際的な生活原理となつて及んできたものである。(前掲、一五五頁による)

(4) ダンテ「神曲」の次の解説を参照した。

Erick Griffiths and Matthew Reynolds ed., *Dante in English*, UK: Penguin Books, 2005.

G・ホームズ（高柳俊一、光行江訳）「ダンテ」教文館、一九九五
本書はOxfordのPast Masters seriesの一冊、一九八〇

マリーナ・マリエッティ（藤谷道夫訳）「ダンテ」白水社、一九九八、
クセジュ文庫、一九九五

R・W・B・ルイス（三好みゆき訳）「ダンテ」岩波書店、二〇〇五

(5) William Langland: *Piers the Ploughman*, tr. and with an Introduction by J. F. Goodridge, England: Penguin Books, 1959, revised 1966

ラングランドについて詳細な経歴は不明とされているが、一四世紀牧師であった。彼は一三三三年生れ、世期の終りまで生存した。生まれたのはシュロップシャーのあるところで、父はオクスフォードシアに土地をもっていた。「多分農業を営んでいたと思われる。」彼は多分大きな修道院で教育を受け、そこで祭司になる普通の神学的訓練を受けた。しかし保護者の死亡のため下級に止り、教会の牧師に昇進はできず、不運な牧師は牧師プロレタリアートに屈したとされた。彼は神学に「浸透（submerged）」し並々ならない私的レベルに達していたものとされている。もう一つとして、彼はいたるところを歩き、あらゆる種類の人と交り、とくにロンドンを知り詩作を深め、そこで妻子と

家族生活をした。当時英国はベストで人口上大きな打撃をうけ（一三八四、九、一三六一、一三六九、一三七五、六）、欧州で三分の一減少とされたが、英国の最近の研究には四七％減とされ、また大農民一揆（一三八一年）がワット・タイラーに率いられ、マナー、僧院、ロンドンをおそうという大事件がおこった。「農夫ピアス」が、一方では、自らは神の奉仕者（ministry）として、他方では、荘園や農民の崩壊をどうみていたかが問われることになる。彼の「農夫ピアス」は二部三〇章から成る。一部「農夫ピアスの夢（Vision）」一七、二部「善行、より善い行い、最高の善行の夢（ハニョ）」とある。彼の詩は擬人法で、韻は頭主に用いるとされる。ここでヴィジョンとは未来のあり方の思考をさし、そのための発想をイメージンナリ imaginary という。のちの「ユートピア」と殆ど変わらない。「啓蒙」には主体のヴィジョンをふくむのである。イマジンは想像に止まらない。二部は順次、七つの罪（Sin）をこえてゆくのに当たる。しかし「貧困」がその温床と位置づけている。

この本は、しかし一五世一杯広く読まれていたが一六世紀中頃からは大変読まれなくなり、「むずかしく、わかりにくい」とされ「その時代の誤った内容」とさえ云われ、一九世紀まで版がないという。だがその後、文学作品としての再評価が高まり英国の代表的作品並みに評価されつつあるとされている。しかし研究者の評価はいま一つであ

り、編者（一九二七 六五）が編集に従事したときも「驚いたことに協力は殆どなく、テキストの現行版は全くなかった。」（一〇 一二頁）という。なぜかについては今なお明瞭とはいえない。だが一応は「ウィクリフ」の使途とみられている。つまり宗教が主目標で個人主体つまり啓蒙は従とみられているとされている。本稿ではそれゆえとり込まなかったのであるが、農民に関して欠きえない。

- (6) この作目は「サア・トマス・モアの書」と題して演目に含まれたがそれには二〇〇五年にはじめてRSCにとり上げられ上演されたものという。次書の第二版（二〇〇五）にのった。なお『トマス・モア資料集』にはA・ムンディとの共作として全文のついている。

S. Wells and G. Taylor (eds), *The Oxford Shakespeare-The Complete Works*, 1986, second ed, 2005, Clarendon Press, Oxford.

G. B. Wegner and S. W. Smith (ed8), *A Thomas More Source Book*, Washington, D. C.; The Catholic University of America Press, 2004. この中
に Munday and Shakespeare, *Sir Thomas More*, C.1592 以下全文のついている。

- (7) James Shapiro, *1599-A Year in the Life of William Shakespeare*, London: Faber and Faber, 2005. この書は「シェイクスピアのある一年」一五九九年の冬、春、夏、秋とめぐりながら、歴史的背景を具体的に作品とからめて詳細に跡づけた、いわば歴史的研究書といえる傑作である。二〇〇

六年度サムエル・ジョンソン賞に輝いた。「ハムレット」には秋のところであつてふれている。（三二八 三三八頁）

- (8) 「ハムレット」野島秀勝訳、岩波文庫解説では、一六〇〇年、前掲「オクスフォード・シェイクスピア」では一六〇〇 〇一とある。

- (9) 「ハムレット」岩波文庫、補注において野島氏は、「生か死か」の独言には二通りの解釈があつたことを紹介し、一つは復讐、他の一つは自殺とされている。本稿では他の一つに愛におけるつぐないとしての死を指すとしてみたい。（三三六 三四五頁をみよ。）

- (10) 喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』岩波新書二〇〇八年は、ユニークな読み方で興味深い、私のような把握とは全くちがっている。人生は夢、人生は芝居、芝居とは虚構、「この世は万事芝居の舞台」に通ずるとつけとれる。様々につけとれるといつてよい。

- (11) クエンティン・スキナー（梅津順一訳）『自由主義に先立つ自由』東京・聖学院大学出版会二〇〇一年原文は一九九七年、三二、四四、四三の各頁。

- (12) Quentin Skinner, *Milton and Liberty What does it mean to be a free person?* *London Review of Books*, 2008, 5-22. この論文は、著者が二〇〇八年一月ケンブリッジ大学にて行われた、ミルトン誕生四百年祭記念のために依頼されて行われた講演をもとにしてまとめ、LRB誌に発表されたものである。今日において最も素晴らしい内容となっており、他に

比肩なき充実ふりは見事である。引用はごく一部に止まる。なお引用にはミルトンの論稿が下敷となっているが遂一指示はしていない。ミルトンの思想を浮上させる意図による。

- (13) Gregory Claeys, *Utopias of the British Enlightenment*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994, rep, 2008. [Cambridge Texts in the History of Political thought] 以下Cambridge Text series. ケンブリッジ・テキスト・シリーズと略称。テキストを原文（英訳）のまま収録している。Introductionにおいて、内容分析、研究状況、参考文献を紹介し、最近の研究状況がわかり、今日の課題設定のとき絶好の資料となる。シリーズには約百冊をふくみ、必須のものとなっている。

- (14) Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller eds., *The Foucault Effect: Studies in Governmentality, with two lectures by and an interview with Michael Foucault*, USA: The University of Chicago University, 1991. その中心となる論文ガバメンタリティは、一九七八年カレジドフランスにて講義されたもので、のち英訳され、同年発行された。ユリン・ゴードン、ガバメンタル・合理性と題する紹介論文（イントロダクション）に説明されているように、イギリス一八世紀末の啓蒙主義から自由主義への展開に関するいわば問題提起をなしたもので、右の本はフーコーの没（一九八四）後出版されており、これまた反響の大きさを物語る。「ケンブリッジ大学政治思想史テキスト・シリーズ」は、その編集の意図

の一つには啓蒙思想の広汎な欧米全般にわたる探究と照会にあつたと思われる。ともあれ、政治思想史、とくに自由と民主主義への課題意識の深まりは、格段の水準へと質的な高まり、深まりを示してきたと考へてよい。

- (15) Fania Oz-Salzberger ed., *Ferguson, An Essay on the History of Civil Society*, Cambridge U. P., 1995, 2007. [Cambridge Texts Series]
- (16) 水田洋『アダム・スミス 自由主義とは何か』講談社、一九九七年を必読。本文中、スコットランドのユニオンを「合邦」と訳したのは、水田訳を参照したもの。なお日本の市民社会論については右書をみよ。
- (17) Ross Harrison ed., *Bentham. A Fragment on Government, the New Authoritative Edition by J.H. Burns and H. L. Hart* Cambridge: Cambridge University Press, 1988, 2005 [Cambridge Texts series]
- (18) 永井義雄『ベンサム』研究社、二〇〇三
山田英世『ベンサム』清水書院、一九六七
J.R. デインウィデ（永井義雄、近藤加代子訳）『ベンサム』日本経済評論社、一九九三（Oxford, 1989.）
- (19) M. C. James, *History-Social and Economic, 1815-1939*, U. K.: Intercontinental Book Production, 1975, pp. 16-17.
- (20) Ross Harrison, *Bentham: A Fragment on Government*, Cambridge U. P.:

Cambride Taxis series. P. XXiii.

略号

GW Guardian Weekly.

NLR..... New Left Review.

LBR..... London Review of Books.

日経..... 日本経済新聞

Identity and Enlightenment of The Working Poverty under The Global Recession• 2008

Yoshizo MORI

Abstract

Everyone knows very well today that majority of people globally have fallen into the terrible poverty and destitutions. It means for them unemployment, jobless, homeless, even foodless, so that they are seeking earnestly to get daywork, three meals, and bed, and then looking for full emancipations.

I think such a people's shift of prospects reasonable, of cause, but I could be at once ware of many hardships in front of us, so that I would engage to try next tasks to explore.

I undertake my study in this essay, at first, to know how hard-works people are engaging and their hope in future along with family and friends. I wrote introducing the South Africa people's poverty and Chinese migrant workers.

At the Second part of this essay, by tracing The British modern history, in partisular, English Enlightenment Movement from *Dante:Divine Comedia to Bentham's Utilitarianism*.

I am happy to explain the emergence of modern 'Individuality with High Morality and Sovereignty', so that I could probably extend further in next essay to deal with Liberalism at Victorian Age.